

令和 2 年 5 月 8 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02665

研究課題名(和文)中国語の結果構文に反映された発話者の表現意図の解明：動補構造を中心に

研究課題名(英文)Elucidation of Speaker's Expressive Intentions Reflected in Chinese Resultative Constructions : Focusing on the Verb-Complement Structure

研究代表者

丸尾 誠 (Maruo, Makoto)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10303588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代中国語では動作・行為の結果を表す有力な手段の1つとして、結果補語・方向補語の使用が該当するものの、その使い分けについては、様々な動詞と結合した際に汎用しうる整合的な解釈は確立されていない。本研究では話者が当該の補語を選択し得る動機づけの解明を目指して、個別の結果補語の考察に加えて、カテゴリーを同じくする複数の補語の横断的な用法分析を進めつつ、質的・量的側面から実証的に検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来より、客観性を求めるがゆえに構造主義的な手法が重視されてきた中国語文法研究の分野において、発話者の表現意図という主観的な要素の導入を踏まえた分析を行うことにより、多角的な観点から中国語の結果構文の理論的枠組みの再構築を図ることが可能となる。また、本研究で得られた成果は、結果補語の合理的な解釈に基づく用法の習得を促すという点で、中国語教授法にも適用しうる有益なものであると言える。

研究成果の概要(英文)：In modern Chinese, the use of resultative and directional complements is one of the effective means of expressing the result of an action or behavior however there is no consistent interpretation for how to use depending on the case, which can be generally used when they are combined with various verbs. Aiming at elucidating the motivation of speakers to choose the complement, this study conducted case studies from qualitative and quantitative aspects in addition to the consideration of individual resultative complement while analyzing the cross-sectional usage of several compliments that belong to the same category.

研究分野：中国語学(現代中国語文法)

キーワード：中国語 現代中国語文法 結果補語 動補構造 表現意図

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

中国語の補語は外国人が中国語母語話者並みに使いこなすのが困難な文法事項の1つである。その要因としては「類似表現の使い分けが複雑である」「辞書・文法書類には載っていない用法が日常的に散見される」といったことが挙げられる。そして、結果補語については、各種動詞との組み合わせに見られる生産性の高さから、これを運用する際には「中国語母語話者に特有の発想」を解明する必要に迫られるといった事情が存在する。

2. 研究の目的

本研究は中国語母語話者が結果補語や方向補語を使用する動機づけの解明を目指すものである。個別の結果補語に内在する中核スキーマを抽出するとともに、カテゴリーを同じくする複数の補語の横断的な用法分析を進め、そこから得られた語彙研究の成果を各種統語事象に関連付けて、中国語の結果構文に関する理論構築を図ることを主目的とした。

3. 研究の方法

言語使用者の表現の動機づけ・発想法を背景とした発話意識を考慮に入れようとする本研究の性格上、語感の問題などインフォーマントチェックを継続的に繰り返す必要がある。加えて、母語話者といえども内省のみでは必ずしも気付かえない文法規則を導き出すには、大量の用例の収集・分類そして分析という作業が不可欠であり、収集に際しては検索サイトをはじめとする各種コーパスを利用した。

4. 研究成果

本研究成果の一部として、複数の口頭発表に加えて以下の4つの論文を発表した。以下、各論文の要旨を(1)～(4)に分けて述べる。

(1) 中国語の結果補語“掉”の表す意味について、辞書や文法書類では「離脱」（例：飞掉 [飛んでいく]）や「除去」（例：扔掉 [捨ててしまう]）を表すとされている。フレーズ“洗掉”についても通常は「(汚れを)洗い落とす」の意味でこの除去義が表されるものの、“把衣服洗掉”ではこの区分には見られない「複数の服をすべて洗ってしまう」という動作の完遂義が表される。論文「中国語の結果補語“掉”の用法について — 完遂義を中心に —」では、この完遂義を支える動機づけとして「対象の消失」「心理的圧力からの解放」といった要素の存在に言及した。“掉”を用いて状態義に言及する場合には、元の状態の喪失という発想から状態変化の実現が表される一方で、程度の甚だしさという観点から、状態変化の実現を表出したものであると言える。

(2) 論文「中国語の結果補語“着 zháo”の表す対象への働きかけ—「接触義」から考える—」では、結果補語“着”の表す各種意味について、接触義・付着義とのリンクを念頭に考察した。“着”の有する着点指向という性格は、統語的には“V着”（Vは動詞）が働きかけの対象となる目的語をとれることに表れている。（抽象的なケースも含めた）接触に対する認識の仕方に基づいて区分してみると、“踩着”[踏みつける]類の場合には着点への到達が接触を表すことになるのに対し、“买着”[買って手に入れる]類の場合には接触とは対象物の獲得であり、動詞の有する意図性からこのタイプは(行為の実現を通して)目的の達成を表すことになる。これが、予想外の好ましい結果を表すという話者の主観に関わる用法へとリンクする。こうしたVが行為を表すケースに対し、(物理的な接触でない)事態を表すケースでは、対象への作用の到達(働

きかけ・影響)は結果(状態変化)への言及によって認識されうるものであり、“冻着了/摔着了”[寒くて風邪を引いた/転んでけがをした]などについては、具体的には言語化されていないものの、その結果は容易に予期・判別しうる。一方、“饿着了/累着了”[ひどくおなかがすいた/疲れ果てた]などについては事態を引き起こす要因となる“饿”や“累”が状態的であるが故に、その影響を判別しにくいこともあって、“V着了”の形は往々にして主観的な程度表現に転化しうる。これも結果を認知したことを明示するための一種の手段であると言える。

(3) 論文「中国語の結果補語“住”の用法について — その運用に見られる「働きかけ」の様相について考える —」では、補語“住”の表す「働きかけ」という概念を中心に考察した。一般に“住”の表す意味は「動きの停止」(例: 站住 [止まる])や「安定・固定」(例: 抓住 [しっかりつかむ])といった具体的な事象から説明されることが多い。しかしながら、本研究では当該の事象をもたらした背景に目を向け、心理活動を表す“愣 [ぼかんとする]、愁 [思い悩む]”のような他動性を有さない動詞や“呆 [呆然としている]”のような形容詞とともに補語“住”が運用される動機づけとして、事態による働きかけという外圧の存在に言及した。これは往々にして対象の動きを止めるほどの強い影響力であるといえる。“站住、抓住”などの動作を行う主体が意図を持った有生物である場合とは異なり、事態のような無生物が働きかけの主体となっている場合には、往々にして原因として解釈されることになる。

(4) 論文「中国語の“V成”+名詞性の語句形式の表す状態義」においては、補語“成”の用法分析を主に行った。日本語では「きちんと並んで立つ」のように、通常、様態は連用修飾語を用いて表されるものの、中国語では同意味が、連用修飾語や状態補語を用いて、動詞を前後から修飾して、次のように表現できる。

- (1) a. 整整齐齐地站着
- b. 站得整整齐齐的

類似した「一列に並んで立つ」の場合であれば、例(2)のように結果補語に名詞性の語句を後置させることによって、より簡潔に表すことができる。

- (2) 站成一排

こうした表現ができるようになるためには、中国語的な発想が求められる。このことを念頭に、次の日本語の例文中の「こんなに悩む」の箇所訳出の仕方に着目してみる。

- (3) このことで君は何でこんなに悩んでいるの?
- a. 为了这件事你怎么这么愁?
- b. 为了这件事你怎么愁成这样(/ 这个样子)?
- c. 这件事怎么把你愁成这样(/ 这个样子)?

連用修飾語“这么”を用いて表現した例(3a)は、文法的には誤りはないものの、やや翻訳調に感じられると指摘する者もあり、中国語母語話者であれば、例(3b)のように、あるいは、より中国語的に無生物主語を用いた例(3c)のように、体詞的な“这样”[このようだ]や“这个样子”[こうした様]を結果補語“成”に後置させて表現するのが好む。

本研究では事態を表す動補フレーズ“V成”の後に名詞性の語句を続けて表される有界的な状態義、およびその拡張としての程度義について考察した。“V成”は主に変化という動的な事象を表す形式であるものの、本研究では“坐成一排”[一列に座る]や“坐成一片”[固まって座る]のような行為の後に形成される静態的な形状の描写に加えて、“气成这样”[こんなに怒る]のような眼前の事態を描写する場合に言及した。後者については描写対象の様態を通してそ

の程度の甚だしさを表現したものであるが、「一緒に笑う」の意味を表す“笑成一団”や“笑成一片”のようなケースについても、「まとまり」と「広がり」という一見相反するイメージの観点から、ともに程度の甚だしさ（「すごく笑う」）を表現する手段の一種であると言える。ただし、この“一片”の表す「広がり」についても形式的には数量詞フレーズであることから、実体のない漠然としたものも含めて「輪郭の大きなまとまり」として捉えることにより、“一団”の表す「凝縮されたまとまり」と同様に、“V成”の使用動機となっている有界性との関連を見出すことが可能となることを述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 丸尾 誠	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「中国語の結果補語“着zhao”の表す対象への働きかけ 「接触義」から考える」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『日中言語対照研究論集』	6. 最初と最後の頁 119-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸尾 誠	4. 巻 第38巻 第2号
2. 論文標題 「中国語の結果補語“掉”の用法について 完遂義を中心に」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸尾 誠	4. 巻 第21号
2. 論文標題 「中国語の結果補語“住”の用法について その運用に見られる「働きかけ」の様相について考える」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日中言語対照研究論集』	6. 最初と最後の頁 142-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸尾 誠	4. 巻 第22号
2. 論文標題 「中国語の“V成”+名詞性の語句」形式の表す状態義」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日中言語対照研究論集』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の結果補語“住”の用法について その使用に見られる「働きかけ」の様相について考える」
3. 学会等名 日中対照言語学会 第39回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の動補フレーズ“V成”の表す有界性」
3. 学会等名 2019年『日本言語文化研究』学術研究会（東華大学・名古屋大学・上海外国語大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の結果補語“住”に関する一考察」
3. 学会等名 2018年「日本言語文化研究」学術研究会（東華大学・名古屋大学・上海外国語大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の結果補語“掉”の用法について 完遂義を中心に」
3. 学会等名 2016年度日本中国語学会東海支部例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の結果補語“掉”の用法について考える」
3. 学会等名 2017年「日本語文化研究」学術研究会（東華大学・名古屋大学・上海外国語大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「中国語の「V成」+名詞性の語句」形式の表す状態義」
3. 学会等名 日中対照言語学会 第41回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸尾 誠
2. 発表標題 「補語の教授法について考える」
3. 学会等名 中国語教育学会 第3回地区研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考